

「調律師」という職業——村上春樹「偶然の旅人」論

徳江 剛

一 はじめに

調律師はしばらくのあいだ、彼女の沈黙の深さを測っていた。耳を澄ませ、その沈黙の中に微妙な音の響きを聴き取ろうとした。

右は、村上春樹の短編「偶然の旅人」の一節である。「偶然の旅人」は「新潮」（二〇〇五・三）に連作短編「東京奇譚集」の第一編として掲載され、後に『東京奇譚集』（新潮社 二〇〇五・九）に収録された。ここでは、調律師¹を生業とする男性と、彼が偶然知り合った女性とのやりとりが描かれているが、調律師は沈黙に耳を澄ますことで女性の胸中を汲み取ろうとしている。

この女性は乳癌の疑いがあり、そのことが大きな要因の一つとなって、調律師に次のように性的な関係を求めている。

食事が終わり、ショッピング・モールに帰る途中、彼女は公園の駐車場に車を止め、彼の手を握った。そしてどこか「静かなところ」に二人で行きたいと言った。

その意味で調律師の男性は、先行研究においてしばしば批判されてきたような村上春樹の小説における男性主人公の典型例に漏れず^②、女性の方からアプローチされる男性である。村上の小説におけるこのような男女関係は、宇野常寛によって次のように指摘されている。

そして『ねじまき鳥クロニクル』で春樹が提示したモデル——それはこれまでの作品で培ってきたナルシズムの記述法の、新しい（倫理的な）コミットメントのモデル提示への「応用」である。オカダ・トオルが「夢の中で」ワタヤ・ノボルを殺害したその同刻に彼の失踪中の妻・クミコはオカダ・トオルになり代わり入院中のワタヤ・ノボルを殺害する。ここで試みられているのは、春樹が『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』『ノルウェイの森』を経て洗練させてきた、セクシャルな回路を用いたナルシズムの記述法である。欠落を、傷を抱えた女性が「僕」を無条件に求め、その要求に応えることで受動的なコミットメントが成就していくという回路を春樹はこれらの作品で積極的に用いている。（中略）ハードボイルドでは自己完結することで、すなわち誰にも「承認」を求めないことで維持されていたロマンティズムが、春樹の小説においては「受動的なコミットメント」に縮退する。この縮退によって生じたナルシズムの不足は、当然他者からの承認によって補われなければならないが、春樹はそこで予め欠落を抱え、男性主人公を求めるようにプログラミングされた「他者性なき他者」としての女性を登場させ、彼女たちからの積極的な承認を与えることで、「受動的なコミットメント」を維持したまま男性主体がナルシズムを構築し得る回路を完成させたのだ。^③

確かに「偶然の旅人」において調律師を誘惑するこの女性も、「予め欠落を抱え、男性主人公を求めるようにプロ

グラミングされた「他者性なき他者」としての女性」に当てはまるかもしれない。しかし調律師は、女性の誘いを断る。女性の求めに応じることが「ナルシズムの構築」だとするならば、女性からの誘いを断るこの調律師の男は「彼女たちからの積極的な承認」によって「ナルシズムを構築し」てはおらず、宇野の定義する男性主人公像には当てはまらない。なぜこの調律師は、村上の小説の男性主人公の枠にはまらない、特殊性を持ち得ているのだろうか。

宇野が問題としたのは村上の小説における男女の関係性についてであつた。本稿で扱う「偶然の旅人」においても、調律師と二人の女性との交流が描かれるが、この交流時の彼の態度こそが村上の小説において宇野の想定する典型的な男女関係と大きく異なっているように思われる。以下本稿では、「偶然の旅人」で語られる調律師と女性たちとのコミュニケーションの様相を辿り、調律師という登場人物の特異性を分析することで、村上の小説における男性主人公の描かれ方を問い直す契機としたい。

二 先行研究

まずは先行研究をまとめてみたい。

「偶然の旅人」において最初に目にとまる特徴は、語り手の顕在化についてであろう。『東京奇譚集』に含まれる五編の短編のうち、語り手が一登場人物として登場するものは「偶然の旅人」のみである。ここでは、『回転木馬のデッド・ヒート』（講談社 一九八五・一〇）と同様、「僕＝村上はこの文章の筆者である。」と語る語り手の「村上」が、知人から耳にした出来事を読者に向けて語るという形で記述されている。ここに登場する語り手の「村上」は、

現実の村上春樹と非常に似通った特徴を与えられている。彼は小説家であり、「ライター・イン・レジデンス」のような資格で大学に属し、『ねじまき鳥クロニクル』というタイトルの長い小説を書いていた。ジャズ・ファンであり、また熱心なジャズのLPレコードの蒐集家でもある。「偶然の旅人」はこの「村上」による自己語りから始まり、全体の約四分の一にあたる分量が、「村上」の体験談で占められている。

津久井伸子は、この「村上」の語りから始まるテキストの構成について、テキスト内の記述に現実性を付与するための意図を見てとっている。

『東京奇譚集』の一話目は「僕Ⅱ村上はこの文章の筆者である。」という文章で始まる。つまりこの短編集は、実際に友人が語ってくれた話を、実在の小説家である村上春樹が書いているという体裁をとっており、それは、一方では「奇譚」とする物語に対して、現実味を少しでも付与しようとする意図の表れであると思われる。^①

風丸良彦も津久井と同じく、「テキストの外部で読み手に直接語りかけるような」語り手が登場するというメタフィクション性を指摘しているが、津久井とは逆の立場を取っている。風丸は、伝聞であるにしては語られている情報が緻密であるため、「村上」の語りはノンフィクションではありえないとし、そのことがテキストの虚構性を強めていると主張している。

彼らの過去は目映いばかりのデイトールによって縁どられています。どれも、発話者があたかも緻密に過去を記録し、(唯一「蜂蜜パイ」と登場人物の設定が重なる「日々移動する腎臓のかたちをした石」の「淳平」だ

けは、作家を生業にしているので、自分の日常を日々細部まで記録していた可能性があります（が）、それを余すところなく「僕Ⅱ村上」に伝え、「僕Ⅱ村上」はそれを間接話法で忠実に再現したかのようです。あなたの目の前に現実にそうした発話者がいて、彼らが彼らの過去を右のように語ったとしたら、あなたはそれらを100パーセントつくりばなしだと思うでしょう。あるいは逆に、もし彼らの話が粗い記憶に立脚するものとしたら、あなたはそれを書き起こすときに、大胆な装飾を施すかもしれません。そのあなたの立場が「僕Ⅱ村上」の立場に他なりません。そして、いずれの場合においても、そこに語られる話は、ノンフィクションたりえない、ということになります。そうした提示の手法はすなわち、虚構性をよりいっそう強化する効果を狙います。つくりものとしての器に、さらに頑丈なつくりもののケースを被せるかのようであり、繰り返しになります（が）、それがメタフィクションの戦略なのです。⁽⁵⁾

細谷博は、風丸がフィクションとノンフィクションの二分法に固執していることを批判し、『東京奇譚集』のリアリティは、現実的なエピソードと非現実的なエピソードが混在することによって宙づり状態になっていると述べている。

もともと、風丸の場合は、かなりフィクションとノンフィクションの区分けに固執しているきらいがある。たとえば、「品川猿」の話がおよそ事実とはいえないから『東京奇譚集』はノンフィクションではないのだ、といったぐあいに。しかし、いみじくも鷗外が「小説といふものはなにをどんな風にも書いても好いものだといふ断案を下す」（『追憶』一九〇九、明42・5）と述べたごとく、いわば、フィクションかノンフィクションかの区分

をはじめとして、ことごとくの種類をすり抜け、あるいは、壊しうるのが小説という雑多なものではなかったか。それは、いわば文芸の鬼つ子として、詩でも劇でも評論でも随筆でも記録でもなく、同時にまた、それらのどれにでも化けかねない代物なのである。

だとすれば、むしろここで、「僕Ⅱ村上」はフィクション性を上塗りした（これはあくまで小説であり、虚構である、と）だけでなく、同時に、ノンフィクション性さえも上塗りした（小説だからこそ、場違いなほど素朴な事実であつてもそのまま取り込めるのだ、と）いうべきかもしれない。いかにも虚構と思われる「品川猿」も、実話とさえ見える「偶然の旅人」も、ともに並べて括られることにより、『東京奇譚集』一卷は、まさに（虚実皮膜の間）^{ひにく}（近松門左衛門）にしばし宙づりにされたのである。⁶

細谷の見解は、津久井、風丸が行ってきた、語り手「村上」の登場によるテキストのリアリティについての議論の総括と言えるかもしれない。

また、重松徹は別の観点に着目している。重松は、テキスト内で調律師が女性に語るアドバイス（「かたちのあるものと、かたちのないものと、どちらかを選ばなくちゃならないとしたら、かたちのないものを選び」という言葉）について、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』（新潮社 一九八五・六）の中の「限定されたヴィジョン」というチームを用いて解釈を試みている。重松によれば、ここで調律師は、不完全で規範から外れて生きる生き方を提示しているのだと言う。

「完全なヴィジョン」を生きようとする類の人間は、必ずやただの人を抑圧し、抹殺する悪と暴力の渦まく場

所へと行きつく。村上春樹は、自分は「限定されたヴィジョン」を選ぶことにより、そのような悪とのたたかいの道を生きようとしていることを読者に伝えようとしていたのだ。(後略)

「偶然の旅人」の主人公のいう「かたちのあるもの」と「かたちのないもの」の二項対立は、これらの「完全」対「不完全(限定)」の二項対立の一ヴァリエーションであろう。「かたちのないもの」を選ぶとは、「不完全」で「限定されたヴィジョン」を生きることとほぼ同様のニュアンスを意味していると思える。

秩序は「かたちあるもの」を好む。そこから落ちこぼれた人生を生きる者を忌む。ピアニストになりそこねた者、正常な性意識をもてない者を弾きとばし、抹殺しようとする。この調律師は秩序の差しむける殺意にたつた独りで耐え、大きく成長し、現在は「かたちのないもの」を選ぶことが結局は「良い結果を生」むのだ、という確固とした倫理を生きている。「そのときはきつかったとしても」だ。

作者はこの連作ふうの短編集の第一作において、秩序の差しだす「かたち」から見て如何に「不完全」で「限定された」生の「かたち」であろうとも、人はそれを受け容れ、自己の「自然」にそって生きることが結局は勝利につながることを、それ以外に人は生きられないことを、定着しておきたかったにちがいない。⁷⁾

重松の主張は、「秩序の差しだす「かたち」から外れ「不完全」とされた生のかたちを受け容れることを、作品の主要なモチーフとして論じたものとなっている。

以上、「偶然の旅人」の先行研究は、現在、その全てが短編集『東京奇譚集』全体を論じたものであるためか、「偶

然の旅人」についての論考は、語り手「村上」の存在や主人公による謎かけのような科白の解釈などに限定されており、未だ多くの問題が掘り下げられていないように思われる。しかし「偶然の旅人」は男女間の相互コミュニケーションに関する問題を内包しており、村上の他のテキストに通底する重要な問題を喚起すると考えられる。こうした点がこれまで見過ごされてきたのではないだろうか。以下本稿では、テキスト内で語られる語りの水準、調律師の性的指向、そして調律師のコミュニケーションの有り様に焦点を当て、調律師の設定について考察することを試みる。

三 「偶然の旅人」の語りの水準

「偶然の旅人」は、その語りが一人称から三人称へと変化していく点が興味深いと言えよう。

前述の通り、テキストの冒頭では、「村上」が経験した奇妙な体験談が語られるが、この体験談の内容はこれまで「村上」の友人の誰も特に関心を抱くことのない些細なものであった。しかし唯一、「村上」と親交のある調律師の男は、「村上」の語りに耳を傾け、それに応えるように、自らの体験した奇妙な出来事について語り始める。ここで物語の水準も、調律師の語る奇妙な体験についての挿話の水準へと移行していく。

冒頭の「村上」の語りは、この短編の中核となる調律師の挿話へと読者に向わせるための枕として機能している。しかし、単に導入のためだけに本文の約四分の一の分量を割いてこの体験談を組み込んだのだろうか。

「偶然の旅人」は、まず語り手「村上」の「僕」という一人称で語られ始める。そして途中から、「村上」の知人の調律師の男の体験談が三人称で語られる。そして物語の末尾では再び「村上」の「僕」という一人称へと戻り、幕が降りる。

「偶然の旅人」と似通った構造を有するテキストとして、「七番目の男」が挙げられるだろう。これは「文藝春秋」（一九九六・一二）に発表され、後に『レキシントンの幽霊』（文藝春秋 一九九六・一一）に所収された短編である。「七番目の男」の冒頭部分は、三人称で語られ始め、この部分では主人公の男の言葉は直接話法で語られる。途中から男が語りを引き継ぎ、「私」という一人称で男の体験談が語られる。終盤では再び三人称の語りに戻って、物語は終わる。

「偶然の旅人」と「七番目の男」という二つのテキストに共通しているのは、テキスト内部に複数の語りの位相が存在していることであるが、興味深いのはテキスト内現在と挿話での語りの人称の変化が逆になっている点である。

「七番目の男」では三人称↓一人称↓三人称という語りの変化が起こっているのに対し、「偶然の旅人」では一人称↓三人称↓一人称という変化が見てとれる。

このことから、「偶然の旅人」における調律師の体験談は、「七番目の男」のように一人称で語られることも可能であったと言える。にもかかわらず、あえて三人称で記述されていると考えられるだろう。

なぜこのような操作が必要だったのだろうか。その手がかりは次の引用の中にあるように思われる。

以下は、テキスト内で主人公以外の人物の内面が描かれる場面である。

身なりが良く、親切で礼儀正しく、ユーモアのセンスがあつたし、ほとんど常に感じのいい微笑みを口元に浮かべていたから、多くの人々は——生理的に同性愛者を毛ざらいする人を別にすればということだが——彼に自然な好感を持った。

二人は不思議な巡りあわせに驚き、そのせいで初対面のぎこちなさは消えた。

彼はにっこり微笑んで相手の目を見た。そして自分はただ場を和らげるために、罪のない冗談を言っているのだということを示した。彼女もそれを理解して微笑んだ。二人はしばらくお互いの目をのぞきこんでいた。

以上の引用に共通して言えるのは、いずれの箇所も視点人物である調律師以外の登場人物の内面が語り手にとって自明のことであるかのように示されているということである。「七番目の男」の主人公が、十歳の時に波に飲まれた友人の胸中を知り得ないことで苛まれ続けていたことは対照的に、「偶然の旅人」において登場人物の内面は読者にとって見えやすくなっている。

後に詳述するが、「偶然の旅人」の調律師は、女性たちに胸中を語らせ得ることがその特徴と言える。だからこそ、一人称の語りではなく、調律師と他の登場人物の描写に偏りがなければのように見え、より客観性を持つように見える。三人称の語りが採用されたのではないか。

四 調律師の性的指向

「偶然の旅人」内の挿話の主人公である調律師は、ゲイであることが挿話の冒頭で明かされる。実際、彼は女性と性交渉ができない人物として描かれている。

次の引用は、まだ自身をゲイと認める前の調律師のヘテロ的な恋愛体験についての描写である。ここでは、女性の

側には性欲がある一方で、調律師の側にはそれがない、というように語られている。

（前略）何度目かのデートになると、相手が自分に何らかの行動を期待しているらしいとわかった。でも彼はあえてその一步を踏み出さなかった。そうしなくてはならない必然性が、自分の中に感じられなかったからだ。まわりの男の友だちはみんな例外なく、性的衝動という抑制しがたいデーモンを抱えていて、それを持て余したり、あるいは積極的に発散したりしていた。しかし彼の中にはそういう強い衝動は見あたらなかった。たぶん自分はおくてなのだろうと彼は考えた。そして正しい相手にまだ巡り合っていないのだろう。

その後調律師は女性との性交渉を経験するが、それは彼にとって幸福な経験ではなかったことが語られている。

大学に入って、同じ学年の打楽器科の女の子とつきあうようになった。話も合ったし、二人でいると親密な気持ちになった。知り合って間もなく、彼女の部屋でセックスをした。彼女の方が彼を誘ったのだ。酒もいくらか入っていた。とくに支障もなくセックスを終えたのだが、それはみんなが言うほど気持ちの良いものでも、スリリングなものでもなかった。どちらかといえば、粗暴でグロテスクなものであるように思えた。性的に興奮したときに女性が身体ぜんたいから発する微妙な匂いを、彼はどうしても好きになれなかった。彼女と直接的な性行為をするよりは、ただ親密に話をしたり、音楽を一緒に演奏したり、食事をしたりしている方が楽しかった。そして日を追うにつれ、彼女とセックスをすることがだんだん心の重荷になっていった。

やがて調律師はゲイとしての自己を発見する。女性から性交渉を求められた際にも、彼はゲイであることを理由に誘いを断っている。しかし、調律師自身はゲイを自認しているが、彼の女性への接触の仕方はヘテロ的にも見える。たとえば、彼は女性と性交渉はできないものの、それ以外の行為は行うことが可能となっている。次の引用では、女性たちとの接触到違和感を抱かない彼の様子が語られている。

ハンサムだったし、育ちも良く、物腰も穏やかだったから、高校時代にはまわりの女の子たちに人気があった。きまった恋人はいなかったが、何度かデートもした。彼女たちと出歩くことを彼は愉しんだ。彼女たちの髪型をすぐそばで眺めたり、首筋の匂いを嗅いだり、小さな手を握ったりするのは好きだった。しかし性的な体験は持たなかった。

このことは、ショッピング・モールで出会った女性に対しても同様である。先の引用にあるように、性的な関係を求める女性の誘いを断った調律師は、以後積極的に女性に接触していく。

彼の説明の趣旨が相手にじゅうぶん理解されるまでに少し時間がかかったが（なにしろ同性愛者に出会ったのは、彼女の人生で初めての体験だったから）、それが呑み込めたあとで彼女は泣いた。調律師の肩に顔を付けて、長いあいだ泣いていた。たぶんショックだったのだろう。気の毒に、と彼は思った。そして女の肩を抱き、髪を優しく撫でた。

彼は長い五本の指で、彼女の髪を優しく、時間をかけて撫で続けた。それは少しずつ彼女のたかぶりを鎮めていった。

彼はサイドブレーキの上に置かれた彼女の手に、手を重ねた。

目を閉じると、プジョーを運転する小柄な女性の顔が目の前に浮かび、その髪 of 感触が指先に蘇った。耳たぶのはくろの黒いかたがが鮮やかに思い出された。

調律師は女性の手を握ることに、また髪を撫でることに抵抗がないように見える。特に髪を撫でるという動作は、『フルウェイの森』においてワタナベと直子の性交渉の直前に行われる行為でもあったように、⁽⁸⁾ 性的な雰囲気はほめかされる動作であるが、彼はそれを積極的に行っている。

さらに、以下に見られるような調律師と姉との接触は、姉弟の親密な関係と呼ぶには濃密であり、セクシュアルな気配を感じさせるものとなっている。

彼は何も言わず、両手で姉の身体を正面からしっかりと抱きしめた。彼女のふたつの乳房のかたちを自分の胸に感じた。姉は彼の肩に顔を置いて、ずっと泣いていた。姉と弟は長いあいだそのままでの姿勢でいた。

彼は姉の右の耳たぶに手をやり、指先ではくろを軽くこすった。それから大切な場所に無言の囁きを送るよう

に、耳にそっとキスをした。

乳房に焦点が当てられるのは乳癌の記述を受けてのことであるとも考えられるが、同様の描写は『ノルウェイの森』の緑とワタナベがデパートの屋上で抱きあう場面にも見られるものである。⁽⁹⁾さらに調律師は、耳にキスをする。これは恋人同士の行為であるかのように読むことができる描写ではないだろうか。

加えて言えば、テキスト内では彼の男性同士の性交渉がまったく描かれない。彼のゲイとしての生活が描かれているのは以下の三ヶ所のみだが、いずれも具体的な描写はない。

それでも彼は、自分はただ性的に淡泊なだけなのだと考えていた。しかしあるとき……いや、でもこの話はやめよう。話し出すと長くなるし、この物語に直接関係のないことだからだ。とにかくあることが起こり、自分が紛れもなくホモ・セクシユアルであるという事実を彼は発見したわけだ。

彼はピアノの調律師をしている。住まいは東京の西、多摩川の近くにある。41歳でゲイである。自分がゲイである事実をとくに隠してはいない。三歳年下のボーイフレンドがいるが、彼は不動産関係の職についており、仕事の都合上カミングアウトができない。だから二人は別々に暮らしている。

何人かの男たちとつきあったのちに、現在のパートナーと巡り合ってもう十年近く、穏やかで不満のない性的関係を維持している。

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』（文藝春秋 二〇一三・四）において、男性同士のオーラル・セックスが直接的に描写されたことは記憶に新しいが、「偶然の旅人」の時点では村上は具体的なホモセクシュアリティの描写を書き込んでいない。それどころか、語り手による説明と本人の自己意識においてこそ彼はゲイであると述べられているが、前述のように、彼と女性との接触にはヘテロ的な様相も窺える。とすれば、彼のゲイという設定は、女性と性交渉を持つことのない男性として調律師を特徴づけるために、便宜的に与えられたものにすぎないのではないか。

テキストではさらに、語られないものの存在が繰り返し示される。

たとえば、冒頭の「村上」の前口上においても、「村上」は人生において重要な意味を持つ体験をしているが、そのエピソードを語ることは避けられている。

というわけでこの場所を借りて、いわば物語の前置きとして、これまでに体験した不思議な出来事について手短かに語ってみたい。取るに足りない、些細な方の体験だけを取り上げることにする。人生を変えた不思議な出来事について語り始めたなら、紙数の大半を使い切ってしまうさうだから。

調律師と姉との和解の場面においても、会話の言説の水準ではあるものの、やはり語られないものが登場する。姉は調律師が事情を説明しなかったことを指摘するが、調律師にとってそれは説明したくないものだった。

「あなたのことをもっと理解してあげるべきだったのかもしれない」と姉は言った。「でもその前に、もっと私

たちにいろんなことを細かく説明してくれてよかったんじゃないかしら。胸を開いて打ち明けてくれるというか、あなたがそのときどんなことを考えていて——」

「説明なんかしたくなかったんだ」と彼は遮るように言った。「いちいち説明しなくても、わかってもらいたかったんだと思う。とくに、姉さんにはさ」

姉は無言だった。

彼は言った。「まわりの人たちの気持ちなんて、そのころの僕には何ひとつ考えられなかったんだ。そんなことを考える余裕はとてまなかった」

そして、十年ぶりに姉に連絡を取ろうとした経緯も、調律師は「ちょっとしたこと」と言いつつ、「うまく説明できない」。

やがて姉は口を開いてたずねた。「ちょっとしたことがあって、私のことを思い出したってさっき言ったけど、いったいどんなことがあったの？ よかったら教えて」

「なんて言えがいいんだろう。ひとくちでは説明できない。でもちょっとしたことだよ。偶然がいくつか重なったんだ。偶然が重なって、それで僕は——」

彼は首を振った。距離感がまだうまく戻ってこない。リモコンと置物とのあいだには何光年もの隔たりがある。

「うまく説明できない」と彼は言った。

「いいのよ」と姉は言った。「でもよかった。本当によかった」

このように多くの語られないものたちが散りばめられているテキストだが、中でも語られないことが強調して描かれているのが、女性たちがこれまで語ることのできなかった秘密であろう。

シヨッピング・モールで調律師が出会う女性は、それまで誰にも語ることのできなかった、自身に乳癌の疑いがあるという秘密を、彼に打ち明ける。

「誰にも言っていないの。夫にも」

彼はサイドブレーキの上に置かれた彼女の手に、手を重ねた。

「とても怖い」と彼女は言った。「ときどき、何も考えられなくなってしまうの」

調律師の姉もまた乳癌であった。それを弟に伝えることを望んでいたものの、伝えることができなかったことが姉の口から語られている。

「あなたに連絡しようかどうか、ずっと迷っていたの」と姉は言った。「でもない方がいいような気がする、黙っていた。あなたにはとても会いたかった。一度ゆっくり話さなくてはと思っていたの。謝らなくちゃいけないこともあった。だけど……こんなかたちで再会したくはなかった。私の言うことわかる？」

「わかるよ」と弟は言った。

「同じ会うにしても、もっと明るい状況で、もっと前向きな気持ちで会いたかったの。だから連絡するまいって心を決めた。でもちょうどそのときにあなたが電話をかけてきてくれて——」

テキストからは、ショッピング・モールで出会った女性と姉からのこうした告白が、いずれもその直前の調律師による告白に対する応答の形でなされていることがわかる。女性の告白の直前、調律師は先の引用で触れたように、女性からの誘いを断る形で、自身が同性愛者であることを明かしていた。そして姉の告白の直前にも、彼のこれまで語ったことのなかった、同性愛者であることを自覚した当時の心境が語られている。

当時のことを思い出すと、声が少し震えた。泣き出したような気持ちになった。しかし彼はなんとかそれを制御した。そして続けた。

「短いあいだに僕の人生はがらっと変ってしまったんだ。そこから振り落とされないように、なんとかしがみついているのがやっとだった。すごく怯えていたし、怖くてたまらなかった。そんなとき、他人に説明なんてできない。世界からずり落ちていくような気がした。だから僕はただわかってもらいたかったんだ。そしてしっかりと抱きしめてもらいたかった。理屈やら説明やら、そんなものは抜きで。でも誰ひとりとして——」

ショッピング・モールで調律師が会会う女性は、乳癌の疑いがあることを「夫にも」言えずにいた。乳房を失うことで、妻としての、そして母としての自己を喪失するかもしれないという一般に広く共有されがちな恐怖にとらわれて、彼女は口を閉ざしていたのではないだろうか。調律師の姉もまた、乳癌の手術を目前に控え、弟との和解を求め

ながらもそうすることができずにいた。二人の女性たちは、危機感の中にいた。しかし調律師の告白に促されるように、彼女たちは心情を吐露する。このように、彼が彼女たちの語りを引き出すことができたことについては、彼が同性愛者であるという事実が介在しているという点が興味深いと言えるだろう。彼にとって、ゲイとしての自己の発見は、人生が「がらつと変ってしまった」経験であり、「世界からずり落ちていくような」感覚によって記憶されている。彼が自らの危機的な経験を語ることで、彼女たちの語りも可能となっている。彼のゲイという設定は、彼女たちの語りを引き出すことのできる人物として調律師を設定するために付与されたのではないか。

五 「調律師」という職業

ところで、調律師はテキスト内で「調律師」と職業名で呼称される。

登場人物が固有名を持たなかった初期の小説と比較し、近年の村上の小説では登場人物に固有名が与えられることが多い。「偶然の旅人」が収められている『東京奇譚集』においても五編中三編で「サチ」、「淳平」、「みずき」と、固有名の主人公が登場する。また、「どこであれそれが見つかりそうな場所」の主人公は「私」という一人称を用いる。そのため、「偶然の旅人」の主人公は、その呼称から「調律師」という職業が際立たされているようだ。なぜ彼はこの短編において「調律師」でなければならなかったのだろうか。本章ではこの問いについて考えてみたい。

テキストにおいては、調律師の特質が女性たちの語りを引き出す点にあることはすでに述べたが、ここに登場する女性たちと調律師との間には、しばしば沈黙が訪れる。そしてその沈黙には、彼女たちの語られない声が潜んでいる。その声を掴み取るため、調律師は沈黙にじつと耳を傾ける。

「ちょっと待って」と姉は言った。その声から、彼女が声を出さずに電話口で泣いていたことを彼は知った。

「悪いけど、ちょっとだけ待ってくれる」

またひとしきり沈黙が続いた。彼はそのあいだ受話器をずっと耳に押しあてていた。何の音も聞こえない。気配ひとつない。

他の箇所でも同様に、調律師は相手の内面を主観的に推量するのではなく、ひたすら沈黙に耳を傾ける。響きに含まれるサインを、語られ得ない何かを、彼は聴き取ろうとするのである。

また、テキスト内で彼が接触する二人の女性には、どちらも自己の内部に混乱を抱えているのだが、自分ではそれを行うべく整理することができないでいた。

「定期健診のレントゲン写真に疑わしい影が見えるので、もう一度詳しいチェックをしたいって連絡があったんです。もしそれが本当に癌だったら、すぐ入院して手術を受けなくてはならないかもしれません。今日そういう風になっちゃったのは、あるいはそのせいもあったかもしれない。つまり——」

沈黙が少しあった。そして彼女は何度か首を左右に振った。ゆっくりと、でも強く。

「自分でもよくわからない」

調律師はしばらくのあいだ、彼女の沈黙の深さを測っていた。耳を澄ませ、その沈黙の中に微妙な音の響きを聴き取ろうとした。

「誰かに何かを聞いたわけじゃないのね？」

姉の声には特殊な響きがあつて、それが彼を緊張させた。

「いや、誰からも何も聞いてない。何かあつたの？」

姉は気持ちを整理するようにしばらく黙っていた。彼は彼女が話し始めるのを辛抱強く待っていた。

調律師は、耳を澄ませ、彼女たちの語りを引き出す。ショッピング・モールで出会う恐怖に陥った女性を「濃密な息苦しさ」から解放し、先の引用にあるように弟に乳癌の手術のことを言い出せなかった姉と和解を果たすことで、彼女たちの心の乱れを鎮めているように描かれている。

それからまた長い沈黙があつた。でもその沈黙には以前ほどの濃密な息苦しさはなかった。

「さようなら」と彼女は言った。「いろいろと本当にありがとう。あなたに会えて、話をすることができてよかった。少し勇気が出てきたような気がする」

彼は微笑んで彼女と握手をした。「元気でね」

調律師という名の通り、彼は聴き取ることに長けた人物だ。女性たちは、それによって女性性を剥奪されるかわれがちな乳癌という病を（あるいはその可能性を）抱え、精神的危機に陥っていた。調律師は、耳を澄ますことで、彼女たちの危機に触れ、声を聴き、彼女たちの中から何かをすくい取ることを成し遂げている。そして調律師は二人の女性に怒りや失望を抱かせることなく、納得させていく。

調律師とは、耳を澄ますことで楽器の音程の乱れを聴き取り、その乱れを解消し、調和をもたらす職業である。そしてピアノの音程の乱れは使用者自身にも完全には感知することが難しいものであり、だからこそ調律師が必要なのである。彼はまさに、彼女たちが自分たちではどうすることもできない心の乱れを調律したと言えるのではないか。

そもそも調律師が「村上」に語り始めたのは、「村上」の語る「不思議な出来事」に対する応答としてであった。「座談の場で持ち出しても」「熱心に耳を傾け」られることなく、「まるで誤った水路に導かれた用水のように」「名も知れぬ砂地に吸い込まれてしま」っていた「村上」の語り。それに耳を傾け、「しばらく真剣な眼をして考え込んでから」、調律師はその話を語り始める。調律師は「村上」の声をまた聴き取ったのだ。

ここまで、「偶然の旅人」における調律師と二人の女性とのやりとりを辿ってきた。調律師は、女性たちの語られない声に耳を傾け、混乱した彼女たちに調和をもたらしているように見える。彼のこうした能力は、村上の小説に頻出する他の男性主人公が持ち得ないものではなかったか。

「偶然の旅人」の十八年前、村上は『フルウェイの森』（講談社 一九八七・九）を発表している。ここに登場する直子もまた、心に混乱を抱える女性だった。男性主人公と、内面に混乱を抱えた女性との交流が描かれている点で、「偶然の旅人」と『フルウェイの森』は似た構造を持っていると言える。しかし、その中で描かれる男女のやりとりは対極的である。

テキスト内で、直子は自分の抱える病の有り様をワタナベに訴えかける。直子の精神的な病は、治るかどうかわからない。ここで直子は、病んだままの自分を受け容れることができるかどうかをワタナベに問うている。しかしワタナベはその病をいずれ治るものと断定し、回復した後の直子との生活を思い描いている。この時、ワタナベが将来的に共に生きようとしているのは現実には存在しない回復後の直子である。ワタナベは現実には目の前に存在する病人

だ直子を拒絶していると言えるかもしれない。直子が「おそろしく乾いた声」で応答するのは、ワタナベが彼女の意図を汲み取らなかったためである。『ノルウェイの森』ではワタナベと直子との会話のすれ違いが幾度となく繰り返される。ワタナベは女性たちの語られない声に耳を傾けることのできない男なのだ。

調律師とワタナベとの差は、語られない声を聴き取る能力の有無であろう。この能力を持たないワタナベは、女性を「他者性なき他者」として認識してしまっているのではないか。宇野の主張に基づいて言うのであれば、聴き取る能力の欠如した村上の小説の男性主人公たちは「他者性なき他者」として女性を所有することでナルシズムを構築しているのではないか。そして声を聴き取ることのできる調律師は、彼女らの内面に耳を傾けることで、彼女たちの側に立ち得ていると言えよう。

冒頭の問題提起に戻れば、調律師は、この耳を傾ける能力において、村上の小説の男性主人公の中で異質な存在となつていてのではないか。

元来調律師とは、楽器などの音階を調整し、音程を整える仕事である。調律師はまさに、女性たちの不協和音に耳を澄まし、彼女たちを調和の方向へと導いたと言えよう。村上春樹のテキストに度々現れる「他者性なき他者」として女性を結果的に所有してしまうような男性主人公たちは、調律師になれなかった男たちなのである。

注

(1) 調律師を職業とする人物は、「レキシントンの幽霊」(「群像」一九九六・一〇)にも登場する。ジェレミーという名を持つ彼は、建築士の男性ケイシーとの同性愛的な関係が示唆されている点や、家族が体調を崩している点など、「偶然的旅人」の「調律師」と共通する特徴を持っている。

- (2) たとえば、小谷野敦は村上春樹の小説の男性主人公について次のように述べている。「(引用者注——村上作品の主人公について、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の「私」を例に挙げて)、春樹作品の主人公の例に漏れず、女の側で「寝る」ことを拒否するという可能性をまったく考えていない。(中略)『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』では、こういう細部はとりあえず「読者サーヴィス」として片付けることもできた。だが、『ノルウェイの森』でまるでセックス狂のような登場人物たちに出会ってしまうと(千石は「登場人物たちはすべて性的人間に設定されている」と書いている)、要するに自我やら喪失やらがどうこうというのは作品の意匠に過ぎなかったのだと気づかざるをえないだろう。一般に、男はフェラチオをしてもらいたがり、あわよくば精液を飲んでもらいたいと思っているが、女はフェラチオを嫌がり、精液を飲むなどともないことだと思っている。キスの際、舌を入れたがるのはたいい男である。もちろん世の中には、フェラチオの嫌いな男もいれば、精液を飲むのが好きな女もいるだろう。しかし、徹頭徹尾、男にとって都合のいいセックスをお膳立てしてくれる女しか、春樹の小説には出てこないのである。(小谷野敦「『ノルウェイの森』を徹底批判する——極私的村上春樹論」(今井清人編『村上春樹スタディーズ 2000-2004』若草書房 二〇〇五・五 p.78-79))
- (3) 宇野常寛『リトル・ピープルの時代』幻冬舎 二〇一・七 p.103-04
- (4) 津久井伸子「村上春樹『東京奇譚集』——家族という呪縛——」(『宇大国語論究』二〇〇七・三)
- (5) 風丸良彦『村上春樹短篇再読』みすず書房 二〇〇七・四 p.184
- (6) 細谷博「減速された神秘、仕事する者たち——村上春樹『東京奇譚集』——」(『南山大学日本文化学科論集』二〇〇八・三 後に、細谷博『所与と自由 近現代文学の名作を読む』勉誠出版 二〇一三・一 p.480)に所

収)

(7) 重松徹「村上春樹『東京奇譚集』論」(別府大学国語国文学) 二〇〇六・一二)

(8) 以下の引用を参照 「僕は左手で直子の体を支え、右手でそのまっすぐなやわらかい髪を撫でた。僕はそのままの姿勢で直子が泣きやむのを待った。しかし彼女は泣きやまなかった。」(村上春樹『村上春樹全作品 1979-1989』⑥ ノルウェイの森』講談社 一九九一・三 第三章)

(9) 以下の引用を参照 「我々はゲーム・コーナーの裏手で傘をさしたまま抱きあった。固く体をあわせ、唇を求めあった。彼女の髪にも、ジーンズのジャケットの襟にも雨の匂いがした。女の子の体ってなんてやわらかくて温かいんだろうと僕は思った。ジャケット越しに僕は彼女の乳房の感触をはっきりと胸に感じた。僕は本当に久し振りに生身の人間に触れたような気がした。」(村上春樹『村上春樹全作品 1979-1989』⑥ ノルウェイの森』講談社 一九九一・三 第十章)

※「偶然の旅人」の引用は、村上春樹『東京奇譚集』(文藝春秋 二〇〇五・九)に拠る。引用中の傍線強調は引用者によるものである。